

# 四国・水こぼれ話

Water Information Saloon Shikoku

## 談話室 Vol. 33

### 母なる川・肱川とともに

愛媛県 大洲市長

おおもり

大森

たかお

隆雄



平成17年1月11日、4市町村(大洲市・長浜町・肱川町・河辺村)が合併し、新「大洲市」が誕生した。人口は 約5万2千人、面積は約432km<sup>2</sup>である。市街地の中央を県下最大の一級河川「肱川」が流れ、その川面に平成の大普請で誕生した四層四階の天守閣が聳え立つ。往時、司馬遼太郎も絶賛した六万石の城下町である。母なる川「肱川」の恩恵をうけ、「渇水」にはあまり縁がなく、反面、残念ながら「水害」は、数多く経験している。近年では、平成7年に1,000戸以上が浸水するという大惨事となった。同年、直轄河川激甚災害対策特別緊急事業(激特事業)の採択を受け、5ヵ年事業で、平成7年洪水規模の災害を防止するための対策が行われた。しかし、一昨年(平成16年)の8月には、台風16号の襲来により、平成7年の水害時よりも肱川の水位が約1mも高いという災害となった。もしも、激特事業がなければ・・・

私が、市長に就任したのは、新市になった昨年

2月である。選挙公約である「災害に強いまちづくり」を推進するため、ハード面では、山鳥坂ダムの建設推進を訴え、また、ソフト面では、大洲市洪水避難地図の作成に着手。同年7月には市内全戸にマップを配布した。2ヵ月後、再び台風14号の被害を蒙った。1年前の台風よりも水位では、36cm低い程度で、2年連続の台風災害となった。改めて「水害対策の重要性」を身をもって経験した。今年に入り、防災スタッフセミナーが市町村のレベルでは日本で初めて当市で開催されたが、この貴重な体験を財産に、自主防災組織の整備を計って「自らがやれることは自らの手で」を合言葉に、地域が一丸となって積極的に防災行政を推進して参りたい。

まず、手始めとして、肱川の水位を基に「避難準備情報」「避難勧告」及び「避難指示」が適切に発令できるよう、「水位による数値基準化」の準備を進めている。



平成16年 台風16号による東大洲地域の浸水状況



防災スタッフセミナー(模擬演習)風景